

第9回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「トンボ池」

東京都 創価高等学校 3年 田口 健司



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『トンボ池』

東京都 創価高等学校 三年 田口健司

カン、カン、カーン。昼休みの鐘が鳴りました。生徒たちはめいめい仲良しで集まって、弁当を食べながら楽しそうにおしゃべりを始めました。波吉はひとり、机を窓に寄せてひっそりと弁当のふたを開けました。今日は暑い日で、窓の外には、遠くの山のすそ野まで広がる田んぼの稲がうす緑色に輝くのが見えました。稲は水面が見えないほどに育っていました。

一年前から、波吉はいつもこうやって窓の外を見ながら、ひとりで弁当を食べ、ひとりで昼休みをすごしました。ほとんどのクラスメイトは波吉に話しかけることはないし、何人かは波吉をからかいました。その子たちは波吉を「ネズ吉」と呼びました。ネズ吉の「ネズ」はネズミのネズでした。波吉もっているカバンや筆入れはあちこちすり切れていたし、弁当の中は下手にこしらえた白おむすびだけでしたので、なんだか波吉はひどくみすばらしく見えたのです。服だって、クラスメイト達も、みんなここの農村の子ですから、麻を織っただけの似たようなものを着ていたので、その中でも波吉のものは特別汚く見えました。そんなふうでしたので、もともとおとなしい波吉は、学校ではほとんどしゃべらない子になりました。今のとなりの席の子は次郎でした。

次郎は波吉と家が近くて、少し前まで、毎日いっしょに学校に通っていた幼なじみでした。その次郎ともほとんど口をきかなくなりました。そのうちにふたりは別々に学校に通うようになりました。次郎は波吉をからかう子たちの仲間には入らず、今でも時々話しかけるとときには、「なっちゃん」と波吉を変わらないあだ名で呼んでいました。

カン、カン、カーン。下校の鐘が鳴りました。その日も波吉はひとり、田んぼの間のくねくね曲がる細い道を歩いて帰りました。家に着くと、真っ先に、布団で寝ている母親の枕元に行きました。

「母ちゃん、今日はなんもなかったか。だいじょうぶやったか。」

波吉の母親は一年前から重い病にかかっていました。その間、波吉は看病を続け、病気の母はいろいろな家のしごとままならなかったので、そ



の多くを波吉が引き受けていました。父親はというと、波吉はまだ幼いころに亡くなったので、波吉は覚えてもいません。どうして亡くなったのか、その理由はまだ母に尋ねたことがありませんでした。それらが、クラスメイト達がからかい、奇異に見る、波吉のもちものや弁当の中身や服やの理由でした。

波吉はやさしい子どもでした。夜になると、波吉は水を汲みに、家から下っていく細い道を少し行ったところにある泉まで、ひもが付いているかめを肩にかけてでかけました。まだ元気だったころの母は、この泉から湧き出る水のことを「栄養がたくさんあるし、おいしい」といつも言っていました。波吉はそれを覚えていたので、母が病気になってからは毎晩その泉の水を汲んで母に飲ませました。泉のまわりには両手を広げていっぱい葉を茂らせた木が並び、背の高いアシも茂っていたので、夜の泉は暗く、川底の長い水草がゆらめくのがなんだか不気味だと、波吉はいつも思っていました。しかし、母にしてあげられることは何でもしたいといったような気もちであったので、波吉は決まって泉の奥、直接水の湧き出ている、一番きれいな水のところまで行って水を汲みました。それでも、やっぱりなんだか怖くて、帰り道はいつも走って家に帰りました

その泉は、波吉と次郎が「トンボ池」と呼んだ泉でした。その泉には、驚くほどたくさんさんのトンボが飛んでいたし、ほかの場所では見たことのないようなきみどりや桃色にかがやくトンボも住んでいたのです。ふたりは何度もその泉でトンボをとって遊んだのでした。次郎の家は、木々の間に長く伸びる一本道のトンボ池をはさんで波吉の家の反対がわにありました。波吉は水汲みのときに次郎の家が見えると、いっしょに次郎と泉で遊んだことを思い出しました。クラスメイトがなんと言おうと波吉は平気でしたが、次郎とあまり話さないようになってしまったことはずっと気がかりでした。

カン、カン、カーン。一時間目の鐘が鳴りました。となりの次郎が自分の机やカバンをあさっていました。しばらくごそごそした後、次郎が波吉のほうを向いて言いました。

「なっちゃん、今日一日、鉛筆一本貸しちゃりい。おら、忘れたんよね。」波吉は自分の筆入れの中を見ました。どの鉛筆も波吉の人差し指よりも短かったのです。一瞬ためらいましたが、それでもその中で一番長いやつを次郎に渡しました。恥ずかしくて、何も言わずに渡しました。次郎は、あまりに波吉がムスツとしていたので、すぐに消え入ってしまうような小さな



声で、「ありがとうございます。」と言いました。それきり、ふたりは何もしゃべりませんでした。

その日の夜も、波吉はトンボ池へ水を汲みに行きました。稲をなでて吹く涼しい風に蝉の声がとけるような夜でした。トンボ池に近づくと、波吉はそのようすがいつもと少し違うことに気づきました。波吉は息をひそめて泉に近づきました。泉が見渡せる場所に着くと、無数の小さな光がいたり、消えたりしながら、舞い、ゆれているのを見ました。

「ホタルや。」

波吉は驚いて、つぶやきました。波吉にとって、初めて見るホタルでした。今まで、この季節にこんな夜遅くに泉にきたことはありませんでした。波吉はしばらく見とれてそこに立っていました。静かに黙った泉の水面が、一瞬たりとも止まらない小さな命のかがやきをくつきりと映し出していました。

波吉が水を汲んで、その帰り道でした。遠くに見える波吉の家の戸が開き、そこから灯りがもれ、だれかが立っているのが見えました。波吉はだれだろうかと思つて、目をこらしながらもつと近づきました。家の少し手前の幹の太い木の所まで来たとき、その人影が次郎だとわかりました。次郎の向こうには母が立っていて、ふたりで話しているようでした。どうして次郎が来ているのだろうかと考えていると、家の戸が閉まり、次郎がこっちへかけてくるのが見えました。波吉は次郎に会ったとして、何を話せばいいのかわからなかったのです。さつと幹の太い木の陰にかくれました。次郎はいつも波吉がしているように一本道をまっすぐに走って帰っていったので、波吉に気づくことはありませんでした。次郎が波吉のかくれた横を通りすぎてしばらくしてから、波吉は家へ帰りました。母が休んでいる布団まで泉の水を入れたかめを持っていくと、すぐに母が言いました。

「帰り道で次郎ちゃんに会ったかろう。」

少し間があいて、波吉は答えました。

「いんや。」

「あら、おかしいねえ。さいぜんうちに来たばかりやけど。あんたにこれば渡してくださいって。返し忘れてごめんねって。」

そうやって母は波吉が今日次郎に貸した鉛筆を指さしました。

次の日です。カン、カン、カーン。五時間目が終わりました。理科の授業でした。水辺に住む生き物の授業で、なかでも、クラスのみんなは、先生が話したホタルに夢中になっていました。



「ホタル、すごかな。」

「きれいやろうなあ。見てみてえな。」

クラスメイトが口々に言っているのを、はじめはいつものように黙って聞いていた波吉でした。しかし、ホタルを見たのが昨日の今日であったし、その光景があまりにもきれいだだったので、ついにこらえきれなくて、波吉は、波吉にしてはだいぶ大きな声で言いました。

「おら、ホタルば見れるとこ知つとる。」

みんなは少しおどろいて、それから期待をこめた目で波吉を見ました。

「なんや。ネズ吉、ホントか、それ。」

波吉は昨日のできごとをみんなに話しました。そして、ホタルを見たい子は集まって、波吉の案内で泉まで見に行くことになりました。

「なんら、日が落ちたら、あすこ、シブガキの木んところば集合や。」

赤い夕日が稲をダイダイ色に染め、やがて山の向こうへ沈み、うす闇が村をおおいました。クラスの半分くらい、波吉を入れて九人が集まりました。次郎も来ていました。波吉がトンボ池までみんなを案内すると、みんなは泉を見て言いました。

「こまくて、きれいな池やな。」

「でたん、ホタル出るごとあるな。」

みんなは、水に足をつけたり、岩に腰かけたり、それぞれして、暗くなり、ホタルが飛ぶのを待ちました。

ずっと、待ちました。

時がたつにつれ泉の水面の色が暗くなるばかりで、一匹もホタルは現れません。

待つていた子の一人が言いました。

「しけとうなあ。ホタル、出らんやないか。」

いつも波吉をからかう子が言いました。

「なんやネズ吉、ウソついたんか。」

波吉は何も言いませんでした。

「だまくらかしたな。」

「ウソつき。」

「ネズ吉は貧乏やし、ウソつくけん、ドロボウのはじまりや。」

みんなが口をそろえて言いました。

「ドロボウのはじまりや。」

波吉は何も言いませんでした。くやしくてくやしくて、下を向きました。



ジュワツと、足もとがにじむのがわかりました。

そのときでした。ポツリ、ポツリ、大きな水滴がみんなの頭や肩に落ちたかと思うと、すぐに、それはすさまじい大雨にかわりました。

ザアー、ザアアー。

ザアー、ザアアー。

「雨や。」

「うああ。」

みんなは散り散りになって、全速力でそれぞれの家へ走って帰っていきました。波吉はその場に、下を向いたまま立っていました。雨なんか全くかまわないといった気分でした。雨粒がすぐに全身をぬらしました。

「なっちゃん、」

波吉の後ろのすそを引っぱる者がいました。はっとしてふり返ると、次郎でした。

「なっちゃん、おらのカサでいっしょに帰ろう。」

波吉はひとりでいたいと思いました。

「ええよ。そんなんせんでええ。じろちゃん、うち反対がわやん。」

「だめや。カサ入れや。カゼひくで。」

いつもの次郎とちがう、強い声だったので、波吉はおどろきました。じつと次郎が目を見るので、波吉はカサに入りました。

波吉の家までの一本道を、ふたりはしばらく黙って歩きました。たたきつけるような雨粒や、それが葉や岩にあたって立てる音が波吉には都合がよくて、波吉は涙で顔をぐしょぐしょにして泣きました。次郎に見られないようにと、次郎の少し後ろを歩いたので、波吉の背中だけは、雨に打たれっぱなしでした。

ふたりは一本道を半分ほど来ました。突然の大雨は通り雨でしたので、雨は、今はもうまばらになっていました。ぬれた土や草のむせかえるような匂いが辺りを包みました。雨のあとのしんとした静けさの中で、次郎が言いました。

「なっちゃん、おらはなっちゃんがウソ、ついたんやないって、知っつけ。」

波吉はもう泣きやんで、なんだか空っぽな気もちで次郎の言葉を聞いていました。

「昨日、なっちゃんちに、鉛筆返しに行ったやん。その帰りに、おらも見たんよね。ホタル。」



次郎はやけにゆっくり歩きました。波吉も、カサの下で、次郎にあわせてゆっくり歩きました。次郎が言いました。

「それからおら、そんなとき、なっちゃんのお母ちゃんから、聞いたんよね。なっちゃんのお母ちゃんの病気のことと、なっちゃんが毎日、トンボ池の水汲みに行きようってこと。」

波吉はなにも言いませんでした。

「なっちゃん、そげんこと、おら、なんも知らんかったで。なっちゃん、えらいなあ。」

ふたりはまた黙って少し歩きました。次郎が言いました。

「なっちゃん、今日は、ついてへんかったなあ。ホタル、雨ばふるっち、知つとったんやなあ。」

リンリンと、虫の声があちらから、こちらから、聞こえはじめました。

「明日、もう一回みんなさそおうや。晴れとったら、ぜったいホタルでてくるで。」

少しして、波吉が答えました。

「いや、ええよ。もうええ。」

「そうかあ。」

それからまたしばらく黙って歩いた後、次郎が、ひとことひとこと、ゆっくりと言いました。

「なっちゃん、明日、いっしょに、学校行こう。」

波吉はすぐに答えました。

「うん。」

雨はもうすっかりやんでいました。けれども、ふたりはカサをさしたまま、波吉の家まで歩きました。ふたりともあんまりうれしかったので、雨がやんだことにも気づかなかったのです。雨のあとの匂いを、やさしい風が遠くの山の向こうまでほこびました。その風は雨雲をゆっくりと散らしていたので、空にはいくつかの星がかがやきはじめていました。